

トップメッセージ

スポーツを軸とした企業活動を通して、社会的な責任を果たしてまいります。

スポーツ・ファーストの想いを、社員自らが実践すること。

何よりもスポーツを一番に考え、心から愛し、自ら実践し、スポーツのチカラを信じる「SPORTS FIRST:スポーツ・ファースト」という私たちの想いの具現化。その大きなひとつが今年、第3回目の大会が開かれた「UTMF:ウルトラトレイル・マウントフジ」です。企業として特別協賛をし、また同時に社員個人が選手として、スタッフとして、応援する観客として様々な形で参加しました。選手としてだけでなく様々な立場でこの一大イベントに関わることで、スポーツが持つ一体感や達成感、そして非日常の特別な感動などを共有することができました。そこにあるのは、楽しさやおもしろさを超えた、奥深さです。今年はザ・ノース・フェイスがサポートを続け、世界最高齢でのエベレスト登頂を成功させた三浦雄一郎さんも会場に駆けつけてくださいました。これからもスポーツを軸とした企業活動を通して社会的な使命と責任を果たせるよう、いっそう自覚を高め、努力を続けてまいります。

日本のために、世界のために、未来のために。障がい者スポーツへの支援や地域に対する福祉活動などを通して、スポーツにできることを。

2020年のオリンピック・パラリンピック開催が東京に決まりました。それに向けて、東京だけでなく、日本全体が大きく動き始めています。スポーツが、日本のためにできることはどんなことでしょうか。世界のために、そして未来のためにできることはどんなことでしょうか。スポーツの社会的責任は、これからますます重要なものになってくると私は考えます。ゴールドウインは障がい者スポーツへの支援や、地域に対する福祉活動などを通してスポーツ・ファーストの考え方をさらに進め、私たちが成すべきことを全力で進めます。そのために、自ら考え、挑戦し、実践してまいります。商品で、店舗で、イベントで、実現してまいります。

直営店をより活用し、お客様とのダイレクトなコミュニケーションを。

創業以来、「スポーツのある豊かな暮らしを築き上げること」を企業理念としてきたゴールドウインの原点は、「品質本位」「お客様本位」にもとづく「ものづくり」です。どんな技術力も、お客様から評価されてこそ初めて意味を持ちます。そのためにも、直営店をより活用し、お客様の声に耳を傾け、お客様とのダイレクトなコミュニケーションを図り、お客様のニーズと合致する商品をご提供するために心を尽くすこと。その具現化のひとつが、ザ・ノース・フェイスのランニング専門店、東京・丸の内「THE NORTH FACE FLIGHT TOKYO」。こちらはザ・ノース・フェイスにおける、世界初のランニングストアになります。

スポーツを通して、次世代の人材を育成しつづけること。

ゴールドウインは、次世代を担う子どもたちの心身を健全に育むスポーツの機会を、継続的かつ積極的に提供しています。26年以上続くスキートの「ナスターレース」や、スポーツを通してバランスの取れた人間形成を目指す「MIPスポーツ・プロジェクト」をはじめ、テニスの「プレミアム・デー」や「カタレ富山サッカー教室」、「ジュニアチャレンジゴルフ大会」の支援など、スポーツを通して子どもたちを育てる活動を続けられるのも、私たちが支援する活動が社会からも評価をいただけていることの証だと受けとめています。これからも、その裾野を広げるために、続けていくことの価値を大切にしていまいります。

限りある資源の有効活用を、さらに進めてまいります。

当社はISO14001の認証を取得していますが、省資源活動や環境配慮型商品の開発にとどまらず、従業員ひとりひとりが環境を意識して活動することを心がけています。環境保護に関する「GREEN IS GOOD」というテーマを掲げた2008年以来、製造から販売までの過程において、環境負荷の低い材料を積極的に使用し、長く商品を使用しただくことこそが最大のエコであると訴求してきました。さらに昨年開始した「GREEN DOWN RECYCLE PROJECT」によってダウン製品を回収し、有限資源であるダウンの再利用を進めます。また2011年度から始めました高等学校での学校体操服回収は、当初の3校から昨年度は5校となりました。これからも広げていく予定です。

2014年7月

株式会社ゴールドウイン
代表取締役社長 西田明男



目次

トップメッセージ ——— 1
CSRに対する基本的な考え方 ——— 3

SPECIAL REPORT

「SPORTS FIRST」を誰よりも実践する、私たちゴールドウインのリアルな活動。 ——— 4

SPECIAL INTERVIEW ゴールドウインは、障がい者スポーツへの支援や地域に対する福祉活動などを通して、スポーツにできることを追求していきます。 ——— 10

OPEN 社会に開かれた経営 ——— 14

コーポレート・ガバナンス体制／内部統制システム／コンプライアンス研修

FAIR 企画・生産から販売までのバリューチェーン ——— 16

多様なアウトドアスタイルを提案するTHE NORTH FACE +／都会の中で自然を感じられるセレクトショップSaturday in the park／「globe walker」2号店をオープン／世界最高齢80歳でのエベレスト登頂「MIURAエベレスト2013プロジェクト」をサポート／ゴールドウインテクニカルセンター（GTC）での研究開発／中国・ASEANでの技術指導／リペア・サービス／接客ロールプレイングコンテスト／販売員研修合宿／「サプライヤー行動規範」遵守の覚書締結推進と遵守確認を実施

CLEAN 環境保護への取り組み ——— 20

環境を考える製品開発コンセプト「GREEN IS GOOD」／ダウン資源を有効活用する「GREEN DOWN RECYCLE PROJECT」／使わない学校体操服を回収してリサイクル／日本の海岸を掃除するビーチクリーン作戦／アースデイ東京2014に協賛／2013年の環境活動報告／広域認定制度の認定取得／ISO14001認証取得

PASSION スポーツとともに情熱的に働く ——— 24

「スポーツ・ファースト」を実践する社員たち／活発なクラブ活動／スポーツを通じたコミュニケーション／自転車通勤を社内制度で積極的に奨励／身体とメンタルをともにベストコンディションに保つ／恒例の「ウォーキング・キャンペーン」で健康づくり／ワークライフバランスに配慮し、時間外勤務の削減をプログラム化／防災対策の整備で安心して働ける環境を

SOCIAL 誰もがスポーツを楽しむ社会へ ——— 28

日本と世界で最高峰のチルドレンレースをサポート「ナスターレース チルドレン／キッズ ジャパンカップ」／FISウイスキーカップ／プロ選手を講師に招き「カターレ富山サッカー教室」を開催／「東レ パン・パシフィック・テニス2013」をオフィシャルパートナーとして協賛／「甲府国際オープンテニス2014」に協賛／「生きる力」を育む、親子向け学習型トレッキングイベントTHE NORTH FACE 7 NATURE USAGI KIDS EXPLORING PROGRAM／「MIPスポーツゲームズ」への特別協賛／アスリートが浅草寺に集結する「東京スポーツタウン2013」を協賛「チャンピオン」をトップアスリート及びスタッフ着用ウェアとして提供／「寛仁親王記念杯第15回北陸ウェルフェアゴルフトーナメント」／次世代のゴルフプレーヤーを育成する「ジュニアチャレンジゴルフ大会」／高校生が純粋にバスケットボールを楽しむ「チャンピオンカップ」／視覚にハンディがあるクライマーを支援する「Monkey Magic Tee（モンキーマジックTシャツ）」／日本山岳ガイド協会の総合情報サービス「コンパス」の啓蒙活動に協力／すべての人が気軽に山を楽しむために「ザ・ノース・フェイス マウンテンアカデミー for ビギナーズ箱根浅間山」を開催

会社情報 ——— 33

CSRレポートについて

本レポートは、ゴールドウイングループについてより多くを知っていただくため、毎年発行しているものです。2012年度よりCSRの五つの柱として定めた「OPEN」「FAIR」「CLEAN」「PASSION」「SOCIAL」に沿ってページを構成しています。当社は「身の丈にあった、継続的で、全員参加によるCSR推進活動」をモットーに、これからも積極的にCSR推進活動に取り組んでまいります。本レポートならびに当社のCSR推進活動に対するご意見、ご感想、ご要望などをお待ちしております。

※環境面への配慮から本レポートは印刷せず、当社ホームページのみでの公開としております。

報告範囲

対象期間：2013年4月から2014年3月の活動を中心に、一部直近の活動を含みます。

対象範囲：ゴールドウイングループ全17社を対象としております。

発行：2014年7月

発行責任者：管理本部総務部

主要コミュニケーション媒体

ゴールドウイングループホームページ：<http://www.goldwin.co.jp/>

CSRレポート：<http://www.goldwin.co.jp/corporate/info/csr>

会社情報：<http://www.goldwin.co.jp/corporate/info/about>

SPORTS FIRST

「スポーツ・ファースト」というタグラインのもと、開かれた経営、顧客満足、社員育成、地域や社会への貢献、地球環境や生態系への配慮という五つの柱で、スポーツを通じた豊かな暮らしの実現と、社会の発展に寄与することをめざします。

● 企業理念

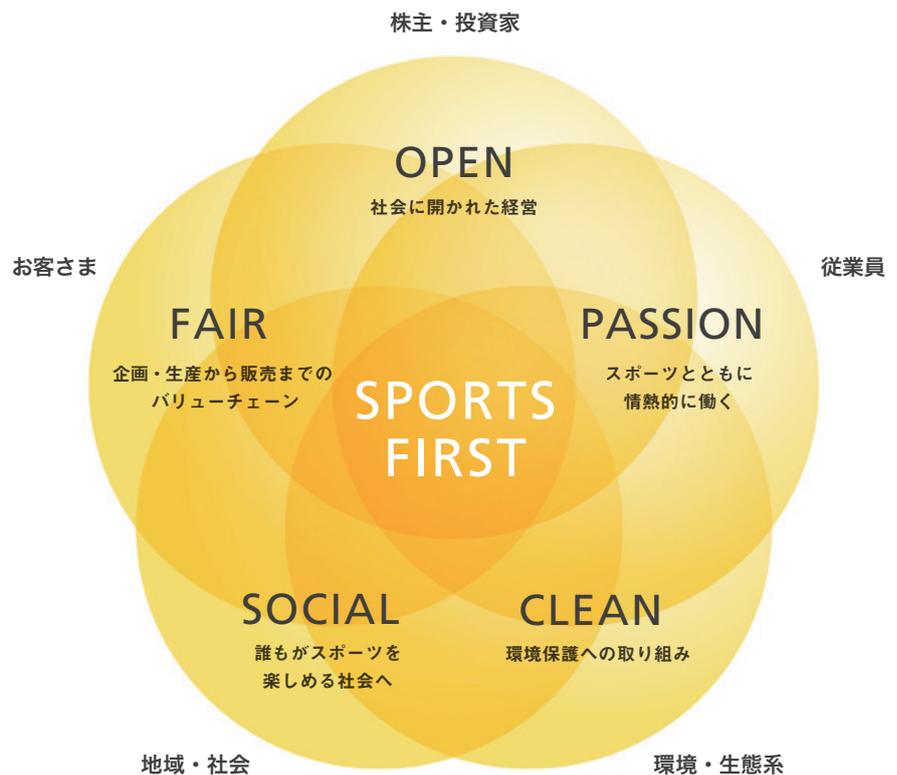
スポーツから、もっと健やかで楽しい明日へ。1950年の創業以来、「スポーツのある豊かな暮らしを築き上げること」を企業理念としてきたゴールドウインは、スポーツへの想いを込めて、2012年に新しいタグライン「SPORTS FIRST:スポーツ・ファースト」を掲げました。スポーツを心から愛し、実践し、その力を信じる。ゴールドウインはスポーツを通じてクオリティ・オブ・ライフの向上に寄与します。

● CSR基本方針

上場企業に求められる高いレベルでの経営の透明化、お客さまの手に商品が届くまで、製造から販売に至るあらゆる段階で心を配ること、従業員がのびのびと健康に働きつづけられる職場環境づくり、そして地域・社会へのスポーツを通じた貢献や、地球環境・生態系への配慮。これらすべてを当社は「スポーツ」への敬意と情熱を通じて実現してまいります。

● CSR推進体制

当社の役員および関係会社代表が出席する「CSR推進委員会」を設置。CSR推進委員会で決定された基本的な活動方針は、グループ従業員全員に徹底され、各部門および個人レベルで具体的な活動を推進します。



SPECIAL REPORT

「SPORTS FIRST」を誰よりも実践する、
私たちゴールドウインのリアルな活動。

何よりもスポーツを一番に考え、心から愛し、自ら実践し、スポーツのチカラを信じる「SPORTS FIRST:スポーツ・ファースト」という私たちの想いの具現化。それは、今年第3回目の大会が開かれた「UTMF:ウルトラトレイル・マウントフジ」や「第34回スポニチ山中湖ロードレース」などのイベントをはじめ、新商品の開発や新店舗の展開、そして社内向けの特別サイトの開設など、ひとつひとつのリアルな活動を通じて実践されています。これが、ゴールドウインの「SPORTS FIRST」です。

富士山麓を約2日間かけて駆けぬける極限のレース。ゴールドウインが特別協賛する第3回「UTMF:ウルトラトレイル・マウントフジ」が開催されました。

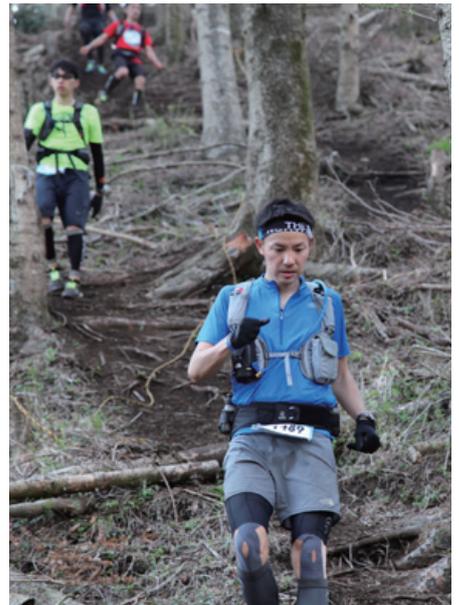
今年で第3回目の開催となる「UTMF:ウルトラトレイル・マウントフジ」と「STY:シズオカ・トゥ・ヤマナシ」が、2014年4月25日(金)スタートで行なわれました。ゴールドウインは今年も特別協賛。また、19名の社員が選手として参加しました(UTMFに男子10名と女子1名の11名、STYに男子8名)。それぞれ、富士山麓を1周(169km)と半周(91.5km)、制限時間46時間と24時間以内のゴールを目指す

という極限に挑むレース。世界中から集まった参加選手たちは、それぞれ1,422名(男子1,206名、女子216名)と968名(男子819名、女子149名)でした。この壮大な大会のサポート役として、100名を超える社員が運営スタッフとして参加。さらに多数の社員が選手のサポートや応援に駆けつけました。自ら走る人、参加選手をサポートする人、大会そのものを支え応援する人、その全員が実践者であり当事者



になります。スタート後、応援するスタッフたちは、エイドステーションやロードサイドに向かいます。同僚の選手を応援するだけでなく、全ての選手を応援するために。その気持ちこそが、この大会に関わるひとりひとりが感じることのできる貴重な経験なのです。私たちの普段の仕事が、「SPORTS FIRST」になっているということ。その思いが、このUTMF

という壮大な大会に続いているということ。そこから、この大会に関わる全ての人に「SPORTS FIRST」が共通の気持ちになることを願います。スポーツが持つ一体感や達成感、そして非日常の特別な感動は、人を変えることができるのだと信じ、この大会の特別協賛を通して、これからもゴールドウインはスポーツの奥深さを具現化していきます。



ゴールドウインが協賛する第34回「スポニチ山中湖ロードレース」が今年も開催され、自然を楽しみながら約13,000名のランナーが走りました。

今年で34回目の開催となる「スポニチ山中湖ロードレース」が、2014年5月25日(日)に開催されました。ゴールドウインは今年も協賛。このレースは残雪の富士山と青葉に包まれる山中湖を走る人気の高い大会で、山中湖1周(13.6km)、ハーフマラソン(21.0975km)の種目があり、合わせて約13,000名のランナーが出場しました。この山中湖ロードレースは、もちろん自分の記録を縮めるためにタイムにこだわる参加者もいます

が、富士山や山中湖周辺の自然を楽しみ、癒されながら、家族や友人たちと一緒に走る参加者も多い大会です。ゴールドウインからは山中湖1周に7名、ハーフに18名の計25名のランナーが参加し、思い思いにランニングを楽しみました。その中には、4月末に開催されたUTMFを完走した疲れも抜けないうちにこの大会に参加する強者もいました。この伝統ある大会に協賛することも、走ることも、私たちの「SPORTS FIRST」です。



「SPORTS FIRST」の想いから生まれる新しい商品があります。 たとえば、トレイルランナーの社員が開発した6ポケットパンツ。

自らスポーツを体験することだけが、私たちの「SPORTS FIRST」ではありません。その想いは、商品開発という形にも具現化されます。UTMFに出場した社員の一人が自らのランニングの経験を活かして開発に携わった商品が、新概念のランニング用ショートパンツ「Flyweight Racing Short:フライウエイト・レーシング・ショート」です。ウエスト部分に6つのポケットを付けて、パンツの収納力の大幅なアップを実現しました。吸汗速乾のストレッチ素材のウエスト部分に配した6つのポケットに、ジェル、プラスコ（飲み物などを入れる携帯用のボトル）、携帯電話、コンパクトアウターなどを収納できます。腰部に広い面積でフィットしているため、高い安定感と不要な揺れの軽減を可能にしました。昨今、トレイル

ランニングの世界に実力のあるロードランナーの参入が増え、スピード化が進み、装備が軽装化していく傾向があります。このパンツの登場により、必要装備をバックとパンツに分散させることができ、必要な物が素早く簡単に出し入れできる新たなミニマルスタイルが実現したのです。自分自身が「SPORTS FIRST」の実践者となることで、選手としての具体的なニーズを体感でき、それを商品開発という形にして具体的に伝えていく。ゴールドウインは「SPORTS FIRST」の想いを、ひとつひとつの商品において、店舗において、スタッフにおいて、リアルな好循環にして展開していきます。



ランニングの多様化に対応した世界初のショップから、新しい提案を。 それが、丸の内の「THE NORTH FACE FLIGHT TOKYO」です。

ゴールドウインのハイパフォーマンス・ランニングストア「THE NORTH FACE FLIGHT TOKYO」。丸の内に生まれたこのショップは、過酷な環境変化の中を走るための機能性と合理性を追求した「THE NORTH FACE FLIGHT」シリーズのウエアとギアを中心に展開しています。ここでは、経験も知識も豊富なスタッフが常駐し、トレイルランニングに関するアドバイスをするだけでなく、世界のトレイルランニングやアスリートの情報を発信します。「THE NORTH FACE」にとって世界初の展開となるラン

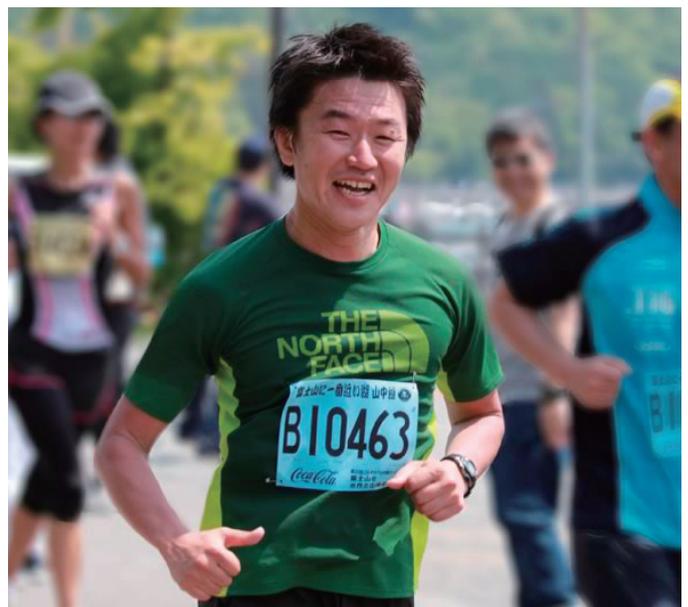
ニングストアとして、このショップでしか手に入らない開発商品やショップオリジナル商品の提案もしています。この店舗は皇居に近い丸の内という立地上、ランニングを楽しむ多くのお客様にご来店いただいています。また、ロードランニングだけでなくトレイルランニングへの参加人口も年々増えてきており、ランニングの多様化に対応したショップとしてさまざまな提案を行っています。ゴールドウインは、お客様の多様なスポーツニーズに対して「SPORTS FIRST」の想いを持って、新しい提案を続けてまいります。



ゴールドウインの社内サイト「SPORTS FIRST」を開設。 スタッフひとりひとりとその決意を共有し、ますます大きく育てていきます。

私たちゴールドウインの「SPORTS FIRST」という想いを、社員ひとりひとりが体現しています。何よりもスポーツを一番に考え、心から愛し、自ら実践し、スポーツのチカラを信じる「SPORTS FIRST」。スポーツと仕事为好影響を与え合い、スポーツによって仕事の可能性が広がり、仕事によってまたスポーツの楽しみが深くなる。私たちの仲間には、この

国を代表するトップアスリートから自ら厳しい自然に挑む者、新しいスポーツに挑戦する者や自分らしいスポーツの楽しみを追求しつづける者など、さまざまな「SPORTS FIRST」があります。その気持ちを全員で共有するために、私たちは、タグラインと同名の「SPORTS FIRST」という社内サイトを作り、その決意をますます大きく育てていきます。



SPECIAL INTERVIEW

ゴールドウインは、障がい者スポーツへの支援や地域に対する福祉活動などを通して、スポーツにできることを追求していきます。

スポーツの社会的責任が、ますます重要になってくる中で、ゴールドウインは障がい者スポーツへの支援や地域に対する福祉活動などを通して、スポーツにできることを追求しつづけていきたいと考えています。そのひとつとしてゴールドウインがサポートを続ける世界的チェアスキーヤーの森井大輝選手と、ゴールドウインのスピード事業部に勤務、現在はイギリスに留学している競泳の鈴木孝幸選手の二人へのインタビューから、私たちの取り組みを紹介いたします。

森井大輝選手

チェアスキーヤー。1980年生まれ。2002年ソルトレイクシティパラリンピックから4大会連続出場。銀メダル3つ、銅メダル1つを獲得。2011-12シーズン、障害者アルペンスキーワールドカップの男子座位で総合優勝。2014年ソチパラリンピック日本選手団主将。



Q: 森井さんがチェアスキーを始めたきっかけを教えてください。

森井選手: 僕がチェアスキーを始めたのは、1998年の長野パラリンピックを病室のテレビで見たのがきっかけでした。その時、脊髄損傷という障害を負って入院中だったんです。失意のどん底で、やる気も無くして退屈なりハビリをしている時期でした。でも、長野パラリンピックの選手たちが、すごい笑顔だったんですね。自分と同じ障害を持っている人たちが笑っている姿を見た時に、チェアスキーをやればああいうふうに笑えるようになると思って始めました。そう決意して、その次の日から退屈なりハビリが、チェアスキーをやるためのトレーニングという意識に変わったんです。

Q: 実際にチェアスキーを始めた時の印象は、いかがでしたか？

森井選手: 一本目というのは、もう何回転んだかわからないくらい転びました。自分はチェアスキーには向いてないかもしれないなって思うくらい。

ついてくれていた母親がフラフラになってしまい、じゃあ次はということでも父親についてもらって、リフトから降りようとした時に僕が転んでしまったんです。その時に父親から「なんでこんな所で転んでいるんだよ」みたいに言われたことが悔しくて、見返してやりたいって思いました。で、そのまま直滑降で滑って見たんです。そうしたらスピードが出れば出るほどバランスが保てることを体感できたんです。長い間、車椅子に座っていたから外力とかGというものとは無縁だったんですね。低速でターンをしようとして転んでいた状態だったんです。元々スキーをやっていたこともあり、スピードを出せば出すほどターンの弧は深く、力が強くなっていくから滑れるんだということがわかり、その日のうちにスキーに乗れるようになりました。そのスキー場の全てのコースを滑れるくらいでした。僕にチェアスキーを販売してくれた方がたまたまチェアスキー協会の副会長さんだったこともあり、チェアスキーをはじめて七日目には大会に出場していました。いくつかの大会に出ているうちにナショナルチームの合宿に声を掛けていただけるようになり、2002年のソルトレイクパラリンピックに出場したのが、僕の初めてのパラリンピックでした。

Q: スキーの感覚とチェアスキーの感覚は、全然違うものなのでしょうか？

森井選手: いいえ、僕が元々持っていたスキーのエッジングの感覚と、その操作性がちょうど自転車っぽくなったという感じでしょうか。自転車に乗っている感覚とスキーを滑るという感覚が僕の中ではボーダレスで、滑れば滑るほど技術が上がっていきました。初めてパラリンピックに出場するまでの2年間で、だいぶ滑り込みましたね。僕がケガをする前にお世話になっていた三国スキー場という小さなスキー場のスキースクールにいらした山岸さんという方にウエアのことで相談をしたら、ゴールドウインさんにお話をさせていただいて、それが僕とゴールドウインさんの最初のつながりになりました。三国スキー場では、チェアスキーのポール練習などでもお世話になり、僕のベーシック技術を鍛えることができた、いい環境でした。

Q: 2002年からのウエア提供になりますから、今年で12年になりますね。

森井選手: 最初の頃は、僕もそうでしたが他の選手もウエアのメーカー

から直接のサポートを受けてという選手は、ものすごく少なかったですね。ウエアの話を見せていただくと、チェアスキーではシートと身体間にレーシングワンピースが入ってきますが、それは極限まで薄くて、おしりに対してどれだけきれいにフィットするかが重要になります。細かくいえば、ウエアの縫い目の位置と座骨の関係にまで気を配るんです。あとは立体裁断による形状でお腹の部分のウエアのごわつきなどを減らしたいなど、トライ&エラーの繰り返しです。特にチェアスキーのウエアというのは、ウエアも用具も、少しでも速く滑るためにはどうしたらいいんだろうというところからのスタートでしたから。僕のチェアスキー人生の中で、滑っている時間より、用具の開発やシートのサスペンションやフレームをいじっている時間の方が、はるかに長かったです。今後もウエアや用具の進化のスピードがもっともっと上がっていくことを、僕自身も楽しみにしています。

Q:今年の2月に行われたソチパラリンピックについて、お話を聞かせてください。

森井選手:また用具の話になりますが、僕が開発したチェアスキーがチームジャパンに貢献できたとしたら、それはとても嬉しく思います。ただ、用具の進化はオーストリアをはじめ世界中で行われていますから、これからますます厳しい勝負になってくると思います。そう考えると次のステップはもう決まっています、カウル(覆い)の製造開発を進めたいです。今回のパラリンピックでは5種目15個のメダルがりましたが、その中で日本製のチェアスキーが獲得したメダルが11個でした。日本人が獲ったのは5個でした。日本チームの強みは個々の力もあったと思いますが、技術でありチームワークです。次の平昌パラリンピックまでに、そのレベルをもっともっと引き上げたいと思っています。

Q:パラリンピック選手も、ハイパフォーマンスのトップアスリートだと感じます。

森井選手:そう言っただけで、僕たちは頑張ってきた甲斐があると思います。健常者の方たちが見た時にも「すごい」って思ってもらえるような技術や力を身につけようと努力してきましたから。ただ、バーンがどんな状態でもハイパフォーマンスの滑りができるように努力をしなければなりませんし、それを可能にするマシンを作っていかなければならないと思っています。もちろん僕も次の平昌を目指して頑張りたいです。

Q:今後、障がい者スポーツを取り巻く環境は、変わっていくと思われませんか？

森井選手:はい、僕たちのトレーニング環境も今どんどん変わってきていることを嬉しく思います。東京オリンピック・パラリンピック、その二つが別々ではなく、一緒になったということ自体も嬉しくて。施設もきついものができると思っていますし、バリアフリーやノーマライゼーションといった考え方がベースとなって、東京での大会を作り上げてくれるのではないのでしょうか。冬のパラリンピックでいえば、次の平昌に向けてソチ以上の成績を残すことでムーブメントといいますが、パラリンピックへの機運を日本国内でどんどん高めていって、2020年につなげられるといいなと思います。先ほど施設の話をしましたけど、街の中でも建物や施設のバリアフ



リー化は進んでいると思います。でも、ヨーロッパやアメリカに比べると、心にバリアがあるのをまだ感じてしまう時があります。たとえば段差のあるお店に入りたい時など、僕が助けてくださいという前にすぐに人に手伝ってもらえるような心のバリアフリーを浸透させていきたいですね。人の気持ちが変わり、ちょっと声を掛けることが自然にできる人が増えていくことによって、社会全体が成熟すると思います。

Q:私たちのスローガン「SPORTS FIRST」を、どう思われますか？

森井選手:それは、僕自身の姿に近いですね。生活の中で、僕もスポーツを一番考えています。僕は「障がいを持っているからこそスポーツをしなければならぬ」って、皆さんに伝えているんです。スポーツをするとADL(Activities of Daily Living)という日常生活動作が改善される、向上されるんですね。そして向上心が生まれる。それは筋力の増強につながります。その筋力の増強が日常生活の動作につながり、トイレに行ったり電車に乗ったりベッドに移ったりという行為がどんどん楽になるんです。楽になることで、今度は外出することが楽になるので、外に出ようという気持ちになる。その先に、社会復帰や社会参加があるんです。そうするとプラスして、さらに身体が丈夫になっていく。だから、スポーツをやりましょう!障がい者になったことで、可能性が狭くなったんじゃない。チェアスキーによって、僕は、僕自身の可能性を広げることができたと思っています。

鈴木孝幸選手

競泳選手。2012年ロンドンパラリンピック日本競泳チーム主将。同大会で2つの銅メダルを獲得。2020年東京オリンピック・パラリンピック招致アンバサダーも努める。ゴールドウインスピード事業部勤務。



Q:今回、鈴木選手がイギリス留学を決意した理由は何でしょうか？

鈴木選手:大きな理由の一つは、水泳のトレーニング環境を変えたかったからです。国内でトレーニング環境に変化をつけることは困難でしたので、海外に出られないかを考えました。

Q:留学中の1日のスケジュールはどのようになっていますか？また留学での感想を聞かせてください。

鈴木選手:曜日によって異なりますが、午前中にジムでドライトレーニング、その後11時から14時まで語学学校での語学学習、それが終わってからスイムトレーニングをして夕方18時頃に帰宅します。こちらでのトレーニング環境がとても私に合っていて、日本では取り組めなかったジムでのトレーニングからも、よい効果を得られています。

Q:普段の練習環境や試合環境で感じていることや、サポートについて思っていることはありますか？

鈴木選手:私の他にも障がい者スイマーが3人おり、そのうち2人はパラリンピック出場経験を持つ選手です。ハイクオリティで高い向上心をもつ選手と一緒に練習できる環境はそれまでと異なり、よいと思います。日本で練習していたときは、公共のプールではパドルやスノーケルなどの器具は使えませんでした。私が練習しているプールでは使いたい放題です。またジムでのトレーニングもトレーナーが私のためのメニューを常に考えてくれ、およそ1カ月おきにメニューを変えてくれるので、常にいい刺激を身体に与えられています。

Q:海外に留学をしている中で、「日本がこうなったらいいな」と思う経験は何かありますか？

鈴木選手:イギリスでは障がい者と健常者の垣根はありません。日本では何か問題が起こるとすぐに責任問題を取り上げ誰かに責任を押しつけようとする。公共の施設や公共交通機関はそれを恐れるあまり厳しい制度をつくります。せっかくハード面でのクオリティが高いのに、それらによって社会的弱者とされる方の自由が制限されているように感じ、残念に思います。

Q:海外に留学して自分自身が競技者として、人間として変わったな、成長したなという部分はありますか？

鈴木選手:日本にいた頃よりも自分自身のことや水泳のことについて、能動的に考えて行動できるようになったと感じます。

Q:留学している中で、仕事に活かせることは何でしょうか？

鈴木選手:それはやはり語学であると思います。まだまだ発展途上ではありますが、約1年間語学を学びますので、それを業務の面でも活かすことができたらと考えています。

Q:鈴木さんにとってアンバサダーも務めた2020年の東京オリンピック・パラリンピックとはどういうものなのでしょうか？

鈴木選手:自国開催での大会ですから、盛り上がることは間違いありません。また日本人の多くが日頃からスポーツに親しんでいることはイギリスにも届いているほどです。オリンピック・パラリンピックを機に、さらにスポーツに興味を持つ人が増えることを願うとともに、私もパラリンピアンとして、日本のパラリンピックのレベルの向上と認知度の向上に何らかの形でサポートできたらと考えています。

Q:障がいをもつ人々が、もっと気軽にスポーツを行えるにはどうしたらよいと考えますか？

鈴木選手:イギリスではインカレにあたる大会に障がい者が一緒に出場しています。オーストラリアでは水泳のオーストラリア選手権が同様に行われています。日本でも健常者と障がい者が同一の大会やイベントに出られるようになると、よいと思います。そしてそのスポーツに興味を持つ人が、障がい者の方にも興味を持てるような仕組みが作れたら効果的だと思います。

Q:イギリスはバリアフリーが進んでいると聞いています。日本との相違点は、どんなところですか？また日々の生活の中で感じられるバリアとはどんなものなのでしょうか？

鈴木選手:先ほどの答えと重なりますが、やはりハード面のバリアフリーよりも、ソフト面のバリアフリーが必要だと考えます。

Q:当社は「SPORTS FIRST」というタグラインを掲げています。社員の行動規範として「何よりもスポーツを第一に考える」というものですが、鈴木さんにとっての「SPORTS FIRST」とは、どんなことですか？

鈴木選手:以前よりスポーツと音楽は、言葉を用いなくても伝わるものがあると思っています。私は、パラリンピアンとして、ゴールドウインの社員として、障がい者も健常者と変わらずスポーツに参加できるように、そしてその交流から障がい者の社会進出がより一層増えるように、何かお役に立てればと思っています。

Q:今後の目標を聞かせてください。

鈴木選手:今年はアジア大会で、よい成績を残すことが目標です。現在見据えているゴールは、リオデジャネイロのパラリンピックで金メダルを奪還することです。

Q:日本のファンの皆さんにメッセージをお願いします。

鈴木選手:日頃から応援くださり、ありがとうございます。アスリートとしては結果を出すことが全てだと思っています。今年のアジア大会、来年の世界選手権、そして再来年のパラリンピックまで最善を尽くしていきたいと思いますので、今後とも応援よろしくお願いたします。



OPEN | 社会に開かれた経営

企業が社会に対してオープンであることが現代においては強く求められています。コーポレートガバナンスや内部統制、コンプライアンスの体制を整えるのはもちろんのこと、適切な方針のもとでソーシャルメディアを積極的に利用することで、社会との関係を築いてまいります。

コーポレート・ガバナンス体制

ゴールドウイングループは、公正かつ効率的な企業経営の実現と、激変する経営環境へのスピーディな対応を目的として、コーポレート・ガバナンスの充実を、経営の最優先課題としております。

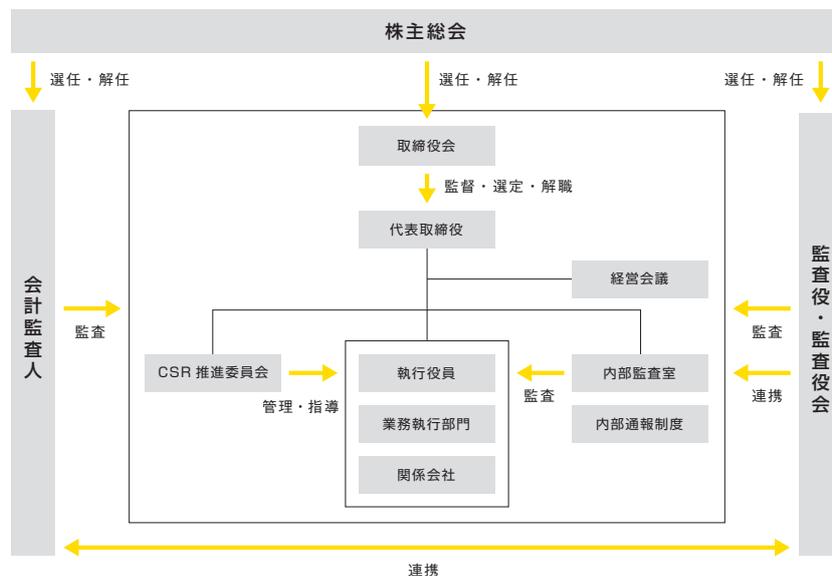
取締役の職務責任を明確にするために、その任期を1年と定めています。取締役会は原則として月1回の頻度で開催されますが、必要に応じて不定期でも開催されます。取締役会では法令で定められた事項および重要事項の決定を行うとともに、業務の執行状況を監督し、その進捗報告を実施いたします。なお、取締役8名のうち、1名は社外取締役であります。

取締役会が任命する執行役員は各々の領域で委譲された権限のもと、取締役会が決定する経営戦略にもとづき業務を執行します。取締役と常勤監査役、執行役員で構成される経営会議は、事業執行に関する重要事項などを審議決定するために、原則として月1回開催されます。

監査役会は4名で構成され、うち3名は社外監査役です。監査役は取締役会で意見を述べ、取締役の業務執行状況の監督を行うことによって、健全な経営と社会的信用の向上に努めます。

内部監査を担当する内部監査室は、他の業務執行組織から独立しています。その客観的な立場より、法令および社内規程の遵守状況の確認を行うとともに、業務と経営効率の改善／向上、内部統制システムの運用状況のチェックを行い、その結果を代表取締役、業務執行取締役および常勤監査役に報告します。

当社は会計監査人に新日本有限責任監査法人を選任しています。会計監査人に正しい経営／財務情報を提供し、公正普遍的な立場から監査が実施される環境を整備しております。



内部統制システム ～業務の適正を確保するための体制

当社はタグライン「SPORTS FIRST:スポーツ・ファースト」、経営方針および行動規範に示される経営戦略ミッションをゴールドウイングループ全役職員によって具現化するために、適切な組織の構築、規程・ルールの制定、情報の伝達および業務執行のモニタリングを行う体制として内部統制システムを整備・維持しております。また内部統制システムは適宜見直し、改善を行い、適法かつ効率的に業務を執行する体制の確立をはかっております。

2008年4月より運用された「金融商品取引法」による内部統制報告制度に対応するために、「ゴールドウイン財務報告基本方針」も制定。財務報告に関する内部統制を強化する体制を整備しました。

内部統制システムの基本方針

(<http://www.goldwin.co.jp/corporate/info/csr/open#section-C>)

企業行動規範・従業員行動基準

(<http://www.goldwin.co.jp/corporate/info/csr/open#section-E>)

コンプライアンス研修 ～管理職には弁護士を講師に迎え実施

当社では2008年に「企業行動規範」と「従業員行動基準」を改定し、企業に求められるコンプライアンスへの理解を深めるための社員研修を、継続的に実施しております。またすべての従業員には、倫理的な行動の指針となるよう携帯用の「コンプライアンスカード」を配布し、常時携帯するよう指導しています。

2013年度はコンプライアンス研修を38回にわたり実施し、平均履修率は87%でした。また東京オフィスの管理職を対象に、弁護士を講師に迎え、コンプライアンスの概念・心がけるべき点について研修を実施。上場企業としての信頼を守るため、コンプライアンスへの理解を徹底しています。

2013年はソーシャルネットワーキングサービスへの投稿写真の炎上が社会問題化しました。当社は、ソーシャルメディアの個人利用における適切かつ積極的な活用の推進とリスクマネジメントの両立を目的として「ソーシャルメディア利用ガイドライン」を作成し、社員に徹底をはかりました。



FAIR | 企画・生産から販売までのバリューチェーン

アスリートの求める高機能・高品質を満たすと同時に、老若男女の多様なライフスタイルに対応できるよう、当社は直営店や自主管理売り場でのお客様との直接のコミュニケーションを通じて商品開発をしています。開発拠点であるテクニカルセンターでは基礎研究から製品開発や生産管理、リペアまでのサイクルを通じて市場価値の創出につとめています。

多様なアウトドアスタイルを提案する THE NORTH FACE + (ザ・ノース・フェイス プラス)

「人間と自然がバランスをもって共生するためのギア」を作ること。それが、1968年の創業以来の「THE NORTH FACE(ザ・ノース・フェイス)」のテーマです。THE NORTH FACE + (ザ・ノース・フェイス プラス)ではザ・ノース・フェイスの商品を中心に、「プラス」の名のとおり、ランニングウェアの「パフォーマンスライン」、都会でのアウトドアライフを彩る「パープルレーベル」、ニュージーランドのアウトドアバッグブランド「マックパック」、メリノウール製のアウトドアウェア「アイスブレイカー」など、他の人気ブランドも扱っています。知識と体験が豊富なスタッフが、老若男女に向けた次世代のホリスティック・アウトドアスタイルを提案しており、幅広い層のお客様から支持されています。2013年度はグランフロント大阪(大阪)、西宮ガーデンズ(兵庫)、ららぽーとTOKYO-BAY(千葉)の3店舗を出店しました。



都会の中で自然を感じられるセレクトショップ Saturday in the park(サタディ・イン・ザ・パーク)

Saturday in the park(サタディ・イン・ザ・パーク)は「土曜日の公園」をコンセプトに、人や自然との関わりを大切にしながら心と体を楽しく整え、毎日を健やかに過ごしたい人のためのセレクトショップです。ザ・ノース・フェイス パフォーマンスラインをはじめ、ダンスキン、C3fitを中心に、機能性・シンプルさ・トレンドをそなえた製品をブランドの垣根を超えて取り揃えております。また、オリジナルブランド「マイ・フェイバリット」を展開し、スポーツウェアの持つ高い機能性を日常で着用いただける提案を続けています。2013年度はグランフロント大阪(大阪)、MARK IS みなとみらい(神奈川)、西宮ガーデンズ(兵庫)、銀座三越(東京)、クレド岡山(岡山)に5店舗を出店し、計9店舗となりました。



「globe walker」2号店をオープン

2013年2月21日、JRタワー内にある「札幌ステラプレイス」の2階に「グローブ・ウォーカー」をオープンしました。これは京都の藤井大丸店に次ぐ2号店になります。旅をテーマとしたこのセレクトショップでは、旅行に出かける時に安心して持っていけるモノ、便利なモノ、機能的なモノを各種取り揃え、旅だけではなく日常使いのアイテムとしてもおすすめしています。

店頭では世界の街をテーマにした演出を施し、その国のカルチャーが伝わるような作品、写真の展示を行っています。テーマに沿ったグッズの販売や、地元のアーティストやブランドとのコラボレーションも行い、北海道ならではの自然を感じる旅やライフスタイルを提示しています。



世界最高齢80歳でのエベレスト登頂 「MIURA エベレスト2013 プロジェクト」 をサポート

世界最高齢(80歳)で世界最高峰のエベレスト(8,848m)登頂という偉業を成し遂げた三浦雄一郎さんの「MIURA エベレスト2013 プロジェクト」を、当社はオフィシャルサプライヤーとして支援しました。ベースキャンプや現地サポートメンバーなど遠征隊メンバーに、超低温下の環境でも運動機能を損なわず、より安全・快適に活動できる「ザ・ノース・フェイス」ブランドのウエアをはじめ用具200点以上を提供。このプロジェクトのサポートを通して得た知識、経験により、今後も商品開発を向上させてまいります。



©MIURA DOLPHINS



ゴールドウインテクニカルセンター (GTC) での研究開発

当社の技術開発拠点であるゴールドウインテクニカルセンター(GTC)は、開発・設計・技術・調達力を結集し、市場競争力のある商品の提供を目標としています。開発システム・設計システム・生産システム・調達システムの各チームに分かれ、ほぼ全ブランドの商品がここで開発されています。

GTCでは運動生理学、運動力学、スポーツ工学といった基礎研究や、専門知識・ノウハウを持つ研究機関・大学との産学官連携も推進しています。新素材の効果を評価するためのオリジナルマシンの開発や最新の3D技術の導入を行い、型紙おこしから装着シミュレーションまでの全工程をコンピュータの中で行うための研究開発もスタートしています。



中国・ASEANでの技術指導

GTCにおける研究開発によって誕生した技術は、日本国内だけでなく中国やASEAN各国の生産工場とも共有されています。これらの工場は、GTCからの技術指導を受け、年を追うごとに不良品率を低下させることに成功しています。



リペア・サービス

GTCでは商品の補修を行うリペアサービスも行っています。ザ・ノース・フェイスの製品は素材や製造上の欠陥が原因であれば無料でリペア。ザ・ノース・フェイス、ヘリーハンセンではキッズ・ベビー用品を対象に、シューズをのぞく全商品の修理も無償で行います。どこに破損が生じてどのような補修を行ったかという年1万件以上のデータは蓄積され、その分析結果は次季企画に反映されます。当社は最新のトレンドのみを追いかけるのではなく、これまでの生産物も大切にしつつ、より信頼できる製品への進化をめざしています。



(リペア前)



(リペア後)

接客ロールプレイングテストコンテスト

当社では店舗でのお客さまとの良好なコミュニケーションをはかるため、販売スキルの向上、販売員の意思統一を目的とする「接客ロールプレイングコンテスト」を毎年行っています。各ブランドからの推薦を受けて全国から選ばれた販売スタッフが、お客様の来店からクロージングまでのロールプレイングを行い、「好感度」「あいさつ・お声掛け」「言葉遣い」「商品情報・専門情報」「会話力」「ニーズチェック」「提案力・説得力」「クロージング」「お見送り」をチェックポイントとして採点されます。

2013年11月11日に開催された本年度の大会では、社長、副社長、各店舗の代表者からなる180名の審査員によって採点が行われ、最優秀賞1名、優秀賞2名、敢闘賞8名が授与されました。



販売員研修合宿

当社では、お客様への対応にあたる販売社員が、接客サービスやブランディングについて考え確認することを目的に、合宿による研修を隔年開催で行っています。2013年度は長野県飯山市のなべくら高原に、販売スタッフ約360名と社内スタッフ約50名が集まり、講話とパネルディスカッションによる研修を実施。現在の市場における自主管理売場の役割を確認。またブランド事業の方針・目標の共有を徹底しました。



「サプライヤー行動規範」遵守の覚書締結推進と遵守確認を実施

当社は公正なルールに則って活動することを「従業員行動規範」の基本方針に掲げています。同様に、海外生産委託先といったサプライチェーンにも、基本方針となる「法令遵守」「労働及び人権」「安全衛生」「環境保全」「安全・安心な製品の生産」「情報管理・公正取引・倫理」、それぞれの行動規範に則ることを前提とした「サプライヤー行動規範」を定めています。お客様の多様なニーズやライフスタイルに応えるため、当社ではサプライチェーンのグローバル化を進めてきましたが、海外企業との取引に際しては、「サプライヤー行動規範」の基本方針を遵守するとの覚書の締結を実施しています。2013年度は前年度同様、93%の覚書の締結率を達成。また前年度までに覚書を締結した企業のうち、取引継続しているすべての企業より遵守報告書を提出していただきました。2014年度は、引き続き90%以上の締結率を目標としています。

CLEAN | 環境保護への取り組み

地球環境や生態系への配慮が企業にも当然のように求められる時代です。当社は自然との調和をうたった環境基本理念と環境方針を定めたほか、製品開発コンセプトとして「GREEN IS GOOD」を掲げ、リサイクルをはじめとする環境保全のための取り組みを通じ、石油原料に依存しない持続可能な社会の構築に寄与しています。

環境を考える製品開発コンセプト 「GREEN IS GOOD(グリーンイズグッド)」

自然がステージのスポーツにまつわる製品やサービスを展開しているからこそ、環境のためにできることをつねに忘れずにいたい。そんな当社の基本理念を「GREEN IS GOOD」と名付け、楽しみながら環境への負担を軽減できるアイデアを大切に、環境に配慮した製品の開発などに取り組んでいます。地球に優しい素材を選び、修理しながら大切に使い、最後はリサイクルをして再び製品化する。そのような取り組みを通じて、CO²を削減するという地球環境の保全を、企業活動及び消費行動という流れの中で実現したいというのが、「GREEN IS GOOD」という言葉にこめた願いです。

GREENCYCLE(くりかえし使う)

使用後の製品を回収し、新たな製品として再生しようという「循環型リサイクルシステム」の試みです。ポリエステル、ナイロン繊維製品をリサイクルすることにより、いずれは枯渇する石油原料に依存せず繊維製品そのものを原料として循環させています。

GREEN MATERIAL(選んで使う)

素材を選択する際は、リサイクル可能か、より少ない資源の利用で早く成長する植物を原料としているか、無農薬の畑で作られたかなどを考慮し、環境への負担を最小限に抑えたものを最優先しています。

(素材例：リサイクルポリエステル、オーガニックコットン、ケミカルリサイクルポリエステル、マキシフレッシュ、テンセル、バンブー、ヘンプ、モダール)

GREEN MIND(大切に使う)

お客様に長く愛用していただくため、機能・耐久性・デザインのすべての面において高品質を提供できるよう製品開発を行っています。またアウトドブランドを中心にWARRANTY(保証)制度を設け、お客様からの修理の依頼に応じています。

環境基本理念・環境方針

<http://www.goldwin.co.jp/corporate/info/csr/clean#section-F>

GREENISGOOD[®]



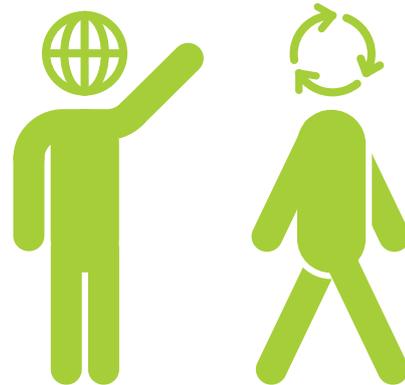
GREENCYCLE



GREEN MATERIAL



GREEN MIND



ダウン資源を有効活用する「GREEN DOWN RECYCLE PROJECT」

ダウン(羽毛)資源には限りがあります。しかしダウンは正しく扱うことによって、人間の寿命以上に長持ちさせることも可能です。使用済みの当社製ダウン製品を店頭または郵送にて回収する「GREEN DOWN RECYCLE PROJECT」は、2013年9月にスタート。回収したダウン製品は河田フェザー株式会社の協力のもと、工場で精製され「GREEN DOWN」の名称でダウンウェアを始めとする新たな製品の原料として使用します。

「GREEN DOWN RECYCLE PROJECT」

<http://www.goldwin.co.jp/greenisgood/greendown/>



リサイクルの対象商品に付く吊札
(今秋の新商品から)



リサイクルしたダウンによって
製造した商品に付く吊札



使わない学校体操服を回収してリサイクル

富山県立富山北部高等学校・高岡工芸高等学校・泊高等学校・桜井高等学校、金沢学院東高等学校に回収ボックスを設置して、卒業する高校3年生の学校体操服を回収しました。2013年度は長袖ジャージ上・下、ハーフパンツなど対象となる2,674着のうち363着を回収しました。全体での回収率は13.6%ですが、学校によっては4割も回収できたところもありました。これらの体操服は石油から精製した場合と同じ品質のポリエステルに再生されて、新しい製品として生まれ変わります。



日本の海岸を掃除するビーチクリーン作戦

今から約130年前に漁師の防水着メーカーとしてノルウェーで創業したヘリーハンセン。当社では、そんなヘリーハンセンの名を冠した「Helly Hansen Ocean(H2O)プロジェクト」の一環として、2005年から日本全国各地の海岸でビーチクリーン作戦を実施。社員とその家族、一般からの参加者を募って行われる、レジャー感覚で楽しむことができる清掃奉仕活動として定着しています。2013年は7月13日に氷見市松田江海岸で実施されました。海岸には漂着したプラスチック、発泡スチロールのゴミも多く、環境への配慮の大切さを再認識できるイベントとなりました。



アースデイ東京2014に協賛 ～期間中店舗で「グリーン電力」購入

1970年に誕生したアースデイ(地球の日・4月22日)は、地球のため・未来のために行動する日です。4月22日前後には世界184の国と地域にまたがった約5,000ヵ所で環境フェスティバルが行われています。「アースデイ東京」もそのひとつで、2014年は4月19日(土)・20日(日)に開催されました。当社は今年も協賛社として参加したほか、期間中に全国の49店舗でバイオマス、風力、太陽光、地熱などによって発電した「グリーン電力」を14,800kWh購入しました。



2013年の環境活動報告

循環型社会に向けての取組

人の健康と環境にやさしい商品の開発(管理項目:販売比率)
環境や健康に配慮した商品の販売拡大につとめました。

【取組結果】

「GREEN DOWN RECYCLE PROJECT」対応商品の販売に取り組んだ結果、環境商品販売比率は前年5.8%から大幅増加し11.7%となりました。

産業廃棄物の削減(管理項目:排出量、廃プラ排出量)

製造から販売までの段階で発生する産業廃棄物を削減するため、返品率低減や不良防止活動、余剰生地再利用など発生予防に努め、製造から販売での産業廃棄物(製品・原材料の廃棄処分含む)の削減活動を推進しました。

【取組結果】

富山工場を中心に、産業廃棄物の削減と再資源化活動を推進し、ゼロエミッションを維持しました。余剰原材料の再利用や製品の消化率アップに努めた結果、製品や原材料の廃棄処分量は43%減と大きく減少しました。返品率は店頭消化率アップのために店間移動などを積極的に進めた結果、前年比7%増となりました。余剰原材料再利用金額は前年比46%増となりました。

限りある地球資源の有効活用

省資源活動の推進(管理項目:原材料使用量改善件数)

設計段階や生産段階での歩留まり改善活動に取り組みました。また物流梱包資材の削減活動を推進しました。

【取組結果】

歩留まり改善件数63件となりました。

低炭素社会へ向けての取組

環境汚染の予防

CO²排出量の削減活動を実施(管理項目:CO₂排出量)

【取組結果】

2013年度はグループ子会社1社のサイト増加にもかかわらず、CO₂排出量を昨年並みのレベルに抑えることができました。各部門で改善活動を行った結果、400件の業務改善が実施され、従業員1人あたりの時間外労働時間も4%減少し省エネルギーに貢献しました。富山地区での降雪量が例年に比べて少なく、融雪に使用する電力量が減ったことも要因の一つです。



自然共生社会に向けての取組

地域社会と共存できる企業

地域社会と共存できる企業となるために、自然とふれあう機会などを増やしました。直営店でのワークショップで環境教育を実施したり、地域内で清掃活動などを行いました。

【取組結果】

THE NORTH FACE HELLY HANSEN 鎌倉店では、2013年12月7日に使わなくなったヨットのシート(ロープ)をリサイクルし、カラフルなクリスマスリースを作るワークショップを開催しました。また周辺地域の清掃活動を、東京本社では近隣4社合同で3回、カンタベリー・オブ・ニューージーランドジャパンとブラックアンドホワイトスポーツウェアでも2回行いました。



広域認定制度の認定取得

当社 FAMS 事業部は2014年3月20日付にて、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律に基づく廃棄物の広域的処理に係わる特例制度」である広域認定制度の認定を取得いたしました。広域認定制度とは、自治体の枠を超えた広域的なリサイクルを促進するために、改正廃棄物処理法(2003年12月)に新設された制度で、この認定取得により布製おむつの回収・リサイクルを全国的かつ効率的に実施できるようになり、お客様は廃棄時に manifests の発行が不要になります。紙製おむつの大量廃棄から、布製おむつの利用・リサイクルによって大幅なゴミの減量になります。今回の広域認定取得により、資源の有効活用をいっそう進めてまいります。

ISO14001 認証取得

当社はグループ会社においても、環境負荷の低減をはじめとする環境保全に取り組んでいます。2011年11月にゴールドウイングループの一員となったブラックアンドホワイトスポーツウェア株式会社は、企業活動や製品、サービスによって生じる環境への影響を持続的に改善するため、環境マネジメントシステムの仕様をさだめた国際規格 ISO14001 の認証を2013年9月に取得いたしました。

PASSION | スポーツとともに情熱的に働く

情熱はスポーツにおいても、働くことにおいても重要な要素です。当社がめざすのは、すべての従業員が心身ともに健康な状態で働きながら、アスリートとしての情熱や、スポーツとの接点を持ち続けられること。さまざまな制度やクラブ活動を通して、情熱をもちながら働き続けるための環境整備をおこなっています。

「スポーツ・ファースト」を 実践する社員たち

何よりもスポーツを一番に考え、心から愛し、自ら実践し、スポーツのチカラを信じる「スポーツ・ファースト」という思いを具現化する社員たち。「スポーツ・ファースト」の実践方法は人それぞれですが、自然を愛し、体を動かし、スポーツを通して人と触れ合うことの中から仕事への活力が生まれてくると考え、当社ではこうした活動を奨励しています。

若林宣宏(ゴールドウイン テクニカルセンター業務推進室)

高校時代はラグビー部だったが、大学で登山をはじめたことで富山との縁が生まれる。ゴールドウインブランドを中心に調達業務を担当しつつ、週末は自然と向き合う大切な時間と位置づけ、フライフィッシングを楽しむ。



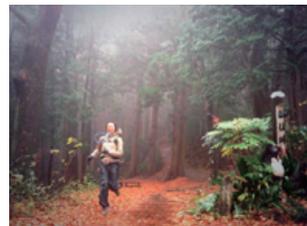
稲垣誠司(事業統括本部 販売3グループ 販売2チーム)

1996年、陸上の契約選手としてゴールドウインに入社。2000年の選手引退を機にアスレチックの販促として社業へ。現在はアウトドアブランドの営業を担当。横のつながりを大切に喜びを共有できる環境をつくろうと、2006年にサッカー部を発足し活躍中。



對馬菜津子(ザ・ノース・フェイス マーチ)

19歳のときにザ・ノース・フェイス御殿場店へアルバイトとして勤務。サタディ・イン・ザ・パーク丸の内を経て、現在の職場に。スキー、陸上、ランニングなどのスポーツを経て、いまは登山の魅力に取り憑かれている。



伊財薫(管理本部 総務部 総務グループ 秘書チーム)

2002年、ゴールドウインに入社。中学校では陸上部、高校ではバスケットボール部、大学では夏テニス冬スキーのサークル。ゴールドウイン入社後にブラジルの格闘技カポエイラと出会い、有段者に。



谷田部充子(株式会社ナナミカ)

1998年4月よりゴールドウインに勤務。アウトドア部門の業務をやり、3年前よりナナミカの業務に。専門学校時代からスノーボードやボディボードをはじめ、6年ほど前からロングボードを楽しむように。



活発なクラブ活動

スポーツは心と身体の健康だけでなく、人と人がその楽しさや喜びによってつながりあうきっかけになります。当社では、スポーツを通じて部署や立場を越えたコミュニケーションの輪を広げていくため、東京地区・大阪地区・富山地区のいずれにおいてもクラブ活動を積極的に推奨しています。各種大会への出場や合宿といった活動を通じて培われた共同意識は、職場環境や仕事に対する意欲を向上させ、熱意あふれる職場づくりにも寄与しています。クラブ活動を通じて自他社のスポーツギアを実際に使用することは、魅力ある新製品開発のヒントにもなっています。

現在活動中のクラブ

(東京地区)

アウトドアクラブ／サッカー・フットサル部／テニス部／フィッシング部／マウンテンクラブ／モーターサイクル部／ランニングクラブ／健脚クラブ／自転車部／野球部／庭球倶楽部

(大阪地区)

サッカー部／マウンテンクラブ／野球部

(富山地区)

アスレチック同好会／剣道クラブ／ゴルフ同好会／テニス部／サーフ＆スノー同好会／ソフトボール部／百名山同好会／フットサル同好会／モータースポーツ同好会／野球部／ヨガ同好会



ランニングクラブ(東京)



野球部(大阪)



テニス部(富山)

スポーツを通じたコミュニケーション

東京地区で毎年秋に行われる「うんどうかい(運動会)」は、社員とその家族の間の親善とコミュニケーション促進に大いに寄与しています。本年度は2013年10月19日によみうりランドにて開催いたしました。今年も部門ごとの6チームにわかれ、年代別徒競走、家族玉入れ、騎馬戦、綱引き、リレーなどで競いました。和気あいあいとした中でも真剣な競技の結果、チームごとの勝敗のほか、活躍した人々には個人賞としてMVPやハッスル賞が贈られました。



自転車通勤を社内制度で積極的に奨励

スポーツアパレル業界として初めて3年前に自転車通勤を社内制度化した当社は、2013年6月に警視庁より「自転車安全利用モデル企業」に指定されました。これは全国で初めての制度で、交通安全教育を受ける機会が少ない社会人の自転車の利用マナーを高めようと、通勤や業務で自転車に乗る従業員が多く、交通安全に力を入れている企業を紹介し、他社の参考にしてもらうことが目的です。当社が自転車通勤を奨励する目的は、自転車用ウェアを提供している企業として、「社員自らが自転車に乗ることで、自転車を楽しむお客様の視点に立つこと」にあります。さらに「より生き生きとした生活を送ること」、「自転車によるエコな通勤を通じて、環境意識を高めること」も目的としています。

この制度により、経路が2～20キロの社員は自転車通勤が認められ、通勤距離に応じた通勤手当が支給されます。また本社ビル地下1階に設けられた駐輪スペースが利用できるほか、地下1階のシャワー室も開放されます(通勤時間帯の7時30分から8時40分まで)。自転車通勤制度の利用者には、7つの禁止事項(飲酒運転や過労運転など)やヘルメット・グローブの着用、任意保険の加入が義務付けられています。



身体とメンタルをともにベストコンディションに保つ

100%の力を発揮して社員のひとりひとりが働けるよう、当社では健康管理体制を充実させ、病気の予防・早期発見に力を入れています。身体だけでなくメンタル面へのケアも重視しており、オーバーワーク気味の社員を対象にヒアリングを実施。産業医との連携によるカウンセリングに加え、東京地区は保険師とも新たに契約を行い、月に3度のカウンセリングを実施しました。

恒例の「ウォーキング・キャンペーン」で健康づくり

歩くことが健康につながるという認識のもと、当社は「ウォーキング・キャンペーン」を毎年行っており、17回目となる2013年は、9月1日～11月30日までの計91日間、当社従業員を対象に開催されました。希望者は歩数計を装着し、歩数を記録表に毎日記入。1日平均1万歩以上で完歩賞、7000歩以上1万歩未満で敢闘賞、5000歩以上7000歩未満で努力賞がそれぞれ贈呈されました。期間は、例年2ヵ月間の開催ですが、効果を上げるため(特にメタボ対策)、前年よりも30日期間を延長しました。



ワークライフバランスに配慮し、時間外勤務の削減をプログラム化

仕事に情熱を傾けるためには、「オン」と「オフ」のメリハリが効いた健康的な生活をおくることが大切です。当社では時間外勤務を削減するため、勤怠管理体制の強化や、週1回のNO 残業 DAYの実施、時間外労働時間削減のプログラム化などを積極的に行っています。過重労働者に対しては、産業医の指導や上長を交えての指導を行なった結果、2013年度は前年度比50%減を達成することができました。

防災対策の整備で安心して働ける環境を

安心して働くためには、常日ごろからの防災意識と体制づくりが欠かせません。2011年3月に発生した東日本大震災時の教訓や2013年4月1日施行の「東京都帰宅困難者対策条例」への対応として、当社ではさまざまな防災対策を行ってまいりました。事務所内の什器転倒防止策として、棚、ラック、書庫、コピー機等の転倒防止工事を実施いたしました。

さらに防災ヘルメットや帰宅用地図の全員配布、帰宅困難者のための措置として3日分の食料、飲料水、簡易トイレやマスクや薬などの衛生医療用品、宿泊用毛布・寝袋の備蓄を、さらに対策本部には携帯テレビや携帯ラジオ、乾電池などの備品備蓄を進めました。震度5強以上で自動配信される安否確認システムも、販売社員含めほぼ全員が登録しております。支店・営業所、グループ会社も上記に準じての対応を進めました。



SOCIAL | 誰もがスポーツを楽しめる社会へ

誰もがスポーツを楽しめる社会とは、老若男女を問わず、障がいのある方もふくめたすべての人が身体を動かす喜びを分かちあえる社会です。そのような社会を築くため、当社は未来を担う子供たちのサポートを中心に、各種スポーツイベントへの協賛をはじめ、地域社会への貢献、自然保護基金への支援などを行っています。

日本と世界で最高峰のチルドレンレースをサポート

「ナスターレース チルドレン/キッズ ジャパンカップ」「FISウイスラーカップ」

どの大会に参加しても同じ基準で自身の技能レベルがわかる「ナスターレース(NASTAR RACE)」。当社は1981年より33年間「ナスターレース」を応援し、また5年間この大会を運営する「NPO法人ナスターレース協会」を支援しています。今年度も「第15回 ゴールドウイン ナスターレース チルドレン/キッズ ジャパンカップ」を特別協賛としてサポートしました。

「ナスターレース チルドレン/キッズ ジャパンカップ」は、全国から子どもスキーヤーが参加する、名実ともに日本一のチルドレンレースです。今年度は2014年3月8日～9日に新潟県の苗場スキー場にて開催され、278名の参加を得て8日はコンビ競技、9日は大回転競技が行われました。U14、U16の категорияでは2日間の合計タイムで順位を競った結果、8名が世界最高峰のFISチルドレンレース「ウイスラーカップ」参加の権利を獲得しました。

FISチルドレンレース「第22回ウイスラーカップ」は2014年4月4日～6日にカナダのウイスラーで開催。この大会も当社はプラチナ・スポンサーとしてサポートしました。U14クラスは国別対抗戦で3年連続4回目の総合優勝、個人でもU14の女子大回転と男子大回転とともに優勝という好成績を得ました。

プロ選手を講師に招き「カターレ富山サッカー教室」を開催

当社がオフィシャルパートナーを務める「カターレ富山」の選手を講師にお招きし、2013年10月26日に富山県の小矢部運動公園にてサッカー教室を開催いたしました。この教室には小矢部市内のサッカースポーツ少年団などから選ばれた60名と、ゴールドウインサッカー部の女子社員17名が参加。「カターレ富山」の選手と育成スタッフから、ボール回しやシュート練習などの指導を受けました。



ナスターレース



ウイスラーカップ



「東レ パン・パシフィック・テニス2013」 をオフィシャルパートナーとして協賛

国内最大の国際テニストーナメント、「東レ パン・パシフィック・オープンテニストーナメント」をエレッセは19年にわたり協賛しています。本年度は2013年9月22日から9月28日にかけて、東京・有明テニスの森で本戦が開催されました。今回もエレッセはすべてのスタッフウェアと、全選手が使用するオフィシャルタオルなどを大会オフィシャルウェアとして提供。またユーザー参加イベントや、ブース出店など、さまざまなプロモーションで大会を盛り立てました。

エレッセPREMIUM DAY

今年も本戦開催に先立って行われた恒例の「プレミアム・デー」には、一般公募によるテニスをこよなく愛する大人の男女50名と、未来のプロ選手を夢見るジュニア50名が参加。TEAM ellesseメンバーである瀬間友里加・詠里花らプロ選手とのラリーやダブルスコンビネーションなどのメニューを楽しみました。



「甲府国際オープンテニス2014」に協賛

世界に羽ばたく若手プロ選手に多くのチャンスを提供することを目的とし、地元のテニスファンによる個人サポーター制を導入した、地域一丸で支える国際オープントーナメントとして知られる「甲府国際オープンテニス」。エレッセはこの大会のスポンサーを2009年より務めています。

“エコ”への意識を共有

2010年大会からは地球環境に配慮したトーナメント運営をめざした活動が始まり、エレッセが開発した繰り返しリサイクル可能な“循環型リサイクル”ウェアをスタッフユニフォームに採用。古くなったテニスボールを素材にオリジナルキャラクターを作成するなどリサイクル活動が行われています。このほかアルミのプラタブやペットボトルの蓋の回収・リサイクルなどを通し、主催・運営スタッフ、スポンサー企業、地元テニスファン、選手たちが“エコ”への意識を共有しています。



「生きる力」を育む、親子向け学習型トレッキングイベント

THE NORTH FACE 7 NATURE USAGI KIDS EXPLORING PROGRAM

ザ・ノース・フェイスは、子供のみ、または親子を対象とした日帰り登山プログラム「THE NORTH FACE 7 NATURE USAGI KIDS EXPLORING PROGRAM」を2012年から始めました。このプログラムは子どもたちが日常から離れ、自然の中を探検することでさまざまな学びを体感し、未来を切り開いていく「生きる力」を育むことを目的としています。今年は以下の4カ所で開催されました。

- 第1回2013年5月18日 神奈川県 鎌倉アルプス/子供のみ参加/定員20名
- 第2回2013年7月27日 山梨県 大石峠/親子参加/定員30名
- 第3回2013年10月26日 神奈川県 金時山/子供のみ参加/定員20名
- 第4回2013年11月9日 兵庫県 須磨アルプス/親子参加/定員30名



「MIPスポーツゲームズ」への特別協賛

当社は2002年より「MIPスポーツゲームズ」を特別協賛しています。このイベントは、「スポーツを通じた子どもたちの健全な育成」という観点から、トップアスリートの指導によるスポーツ体験を通して、子どもたちの新たな可能性を広げることを目的としており、特定非営利活動法人MIPスポーツ・プロジェクトが1年を通じて全国各地で開催しています。2013年度は以下の全国5カ所で行われ、のべ1,983人の子どもたちがこのイベントに参加しました。

2013年9月29日 岐阜県下呂市	参加者：472名
10月13日 山形県山形市	参加者：414名
10月27日 三重県いなべ市	参加者：628名
2014年3月15日 神奈川県厚木市	参加者：260名
3月21日 鳥取県鳥取市	参加者：209名



アスリートが浅草寺に集結する「東京スポーツタウン2013」を協賛 「チャンピオン」をトップアスリート及びスタッフ着用ウエアとして提供

スポーツの振興と普及を目的に、2013年11月16日に浅草寺で開催された「東京スポーツタウン2013」に当社も協賛企業として参加、「チャンピオン」をトップアスリート及びスタッフ着用ウエアとして提供しました。ふだんは競技会場でしか見ることのできないトップアスリートによる本物の競技を、間近で見ることができ、また体験できるイベントで、参加した人たちはたいへん盛り上がっていました。



「寛仁親王記念杯第15回北陸ウェルフェアゴルフトーナメント」

2013年10月16日にゴルフ倶楽部ゴールドウインで開催された「寛仁親王記念杯第15回北陸ウェルフェアゴルフトーナメント」は、大会を通じて障がい者福祉への正しい理解を深める活動の推進を図ることを目的としており、当社もその開催に毎年協力をしております。北陸地域の方々のご厚意により15回開催し、のべ1649名が参加いただき、1680万円を北陸の障がい者福祉施設へ寄贈しました。



次世代のゴルフプレーヤーを育成する「ジュニアチャレンジゴルフ大会」

ゴルフ倶楽部ゴールドウインでは、小学4年生から高校生までの日本ゴルフ協会(JGA)ジュニア会員登録者を対象に、次世代のゴルフプレーヤー人口の拡大と育成を目的とする「ジュニアチャレンジゴルフ大会」を開催しており、第4回目を迎えた昨年は8月9日に行われました。競技は例年同様、18ホールストロークプレースクラッチ方式で行われ、34人が参加し、技を競いあいました。



高校生が純粋にバスケットボールを楽しむ「チャンピオンカップ」

2010年度にスタートした「チャンピオンカップ」。今年度の「チャンピオンカップ」は、埼玉県と東京都で開催されました。

2013年8月29日～30日にさいたま市記念総合体育館で行われた大会には、22校から475名が参加、2014年3月23日に駒沢公園室内競技場で開催された大会には16校が参加しました。東京大会出場チームのほとんどが初出場であり、ふだんは対戦する機会のない学校もあり「貴重な体験だった」という感想が多数寄せられました。



当社は同大会出場選手とのコミュニケーションを通じて、若い世代のバスケットボールプレーヤーのニーズを把握することに努めると同時に、バスケットボールに関するコミュニティサイト「Rokyu.net」の協力のもと、たくさんの若者が競技に熱中できる環境整備をめざしています。

視覚にハンディがあるクライマーを支援する「Monkey Magic Tee(モンキーマジックTシャツ)」

自身もハンディキャッパー・クライマーである小林光一郎氏が理事をつとめるNPO法人「モンキーマジック」は、スクール活動などを通じて視覚にハンディがある人たちがロッククライミングを楽しむことができるよう支援しています。クライミング界を応援してきたザ・ノース・フェイスは、この「モンキーマジック」の活動を2006年からサポートしています。

今年も「Monkey Magic Tee(モンキーマジック Tシャツ)」を製作・販売し、売上の一部を「モンキーマジック」に寄付しました。今年のデザインも、デザイナーのボランティア集団「In House Out」が無償で携わりました。



日本山岳ガイド協会の総合情報サービス「コンパス」の啓蒙活動に協力

2013年の登山シーズン到来を前に公益社団法人日本山岳ガイド協会が運用を開始した、山と自然に関する総合情報サイト「コンパス」。当社ではザ・ノース・フェイス公式サイトから「コンパス」へリンクを貼るとともに、「ザ・ノース・フェイス」店頭で「コンパス」のチラシを配布し、安全な登山やハイキングをめざす啓蒙活動に協力しました。

「コンパス」の最大の特徴はオンラインで登山届を提出できること。安全に山を楽しむためにも、登山計画の提出は欠かせません。地図、天気などの詳細な情報をもとにシミュレーション画面に従って入力すれば、誰でも簡単に登山計画が作成・提出できます。

「コンパス」<http://www.mt-compass.com/>

すべての人が気軽に山を楽しむために「ザ・ノース・フェイス マウンテンアカデミー for ビギナーズ 箱根 浅間山」を開催

最近の登山ブームのなかで、老若男女あらゆる人が山を楽しむことができるよう、「ザ・ノース・フェイス」では初心者から上級者までを対象に定期的に講習会を開催しています。

2013年12月8日は「ザ・ノース・フェイス マウンテンアカデミー for ビギナーズ 箱根 浅間山」と銘打って、日本山岳ガイド協会登山ガイドステージⅡの柏澄子さんを講師に迎えました。箱根の浅間山をトレッキングしながら「冬のウェアリングについて考える」をテーマに実地で学ぶ会となりましたが、山の基本知識を身につけたいビギナーに「登山計画の立て方、地図の読み方、火器の取り扱いなどを学習できた」と好評でした。



会社情報

- 株式会社ゴールドウィン
GOLDWIN INC.
- 東京本社
〒150-8517 東京都渋谷区松漕2-20-6
TEL 03-3481-7201(代表)
- 本店
〒932-0112 富山県小矢部市清沢210
TEL 0766-61-4800(代表)
- 設立
昭和26年12月22日
- 資本金
7,079百万円(2014年3月31日現在)
- 年商(連結ベース)
54,869百万円
- 年商(単独)
46,872百万円
- 従業員
1,355名(グループ2,071名)
- 事業所
本店、東京本社、大阪支店、札幌営業所、
名古屋営業所、北陸営業所、福岡営業所
(2014年3月31日現在)
- 会社概要詳細
<http://www.goldwin.co.jp/corporate/info/about>
- ホームページ
<http://www.goldwin.co.jp/>
- 決算公告・決算短信
<http://www.goldwin.co.jp/corporate/info/ir>

経営指針

1. 強い経営

経営資源の選択と集中を強め、キャッシュ・フロー経営の視点から、経営体質を強化し企業価値を高めます。

2. 速い経営

顧客ニーズの変化に俊敏に対応、商品企画から調達・販売までのプロセスを短縮化し、その運用システムを構築します。

3. きれいな経営

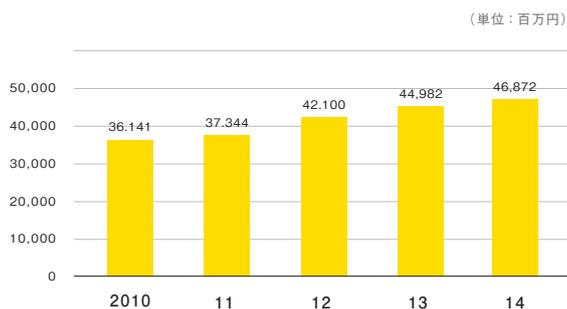
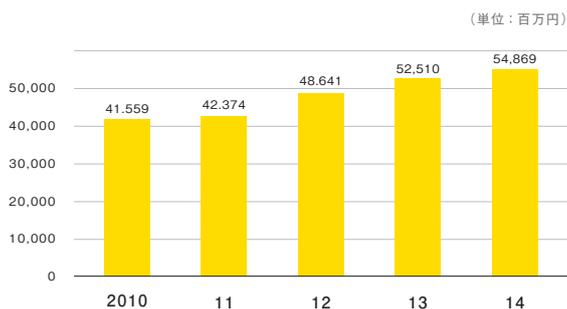
情報開示の透明性と環境への配慮を重視し、社会的に開かれた企業を目指します。

経営情報

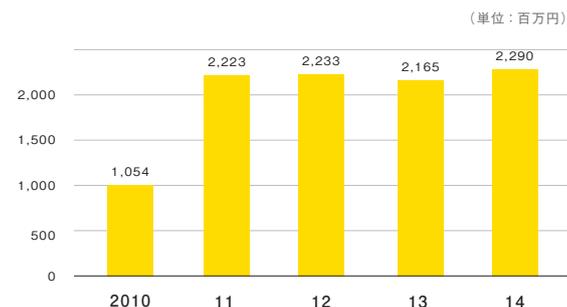
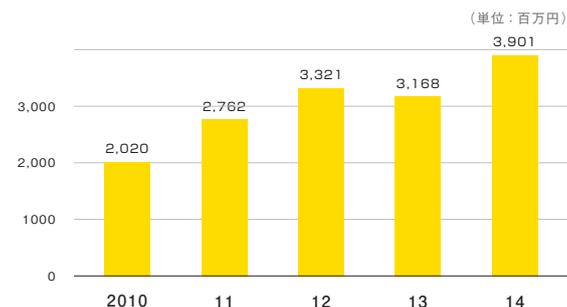
連結

単独

売上高



経常利益



当期純損益

